

# 地域研究コンソーシアム 次世代ワークショップ企画応募申請書

## 1. 企画名

「ユーラシアにおける境界と環境・社会—学際的対話による包括的な「境界」知の獲得」

## 2. 公募枠

自由課題・自由開催枠

## 3. 企画責任者氏名

地田 徹朗 (ちだ てつろう)

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター・助教

## 4. 企画責任者連絡先

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター

北海道札幌市北区北9条西7丁目

TEL: 011-706-2384, 2388

FAX: 011-706-4952

E-mail: tetsuroch[アット]slav.hokudai.ac.jp

## 5. 企画概要

本企画では、ユーラシア各地における「境界」と「環境」および「社会」の問題について取り上げる。本企画で扱うユーラシアの境界地域は、冷戦時代のフロンティア、あるいは、冷戦という文脈の中で境界と環境をめぐる歪みが顕著に現れた地域であり、それが今日でもユーラシアという大きな空間の中で影響を及ぼし続けているという共通性をもつ。

「境界」という用語はしばしば国境に代表される「境界線 (boundary)」と同義で用いられるが、本企画は、そのような境界線の問題だけでなく、国境やその他様々な場所の論理に基づいて措定されるボーダーをゾーンとして、つまり「境域 (borderland)」として捉えるアプローチをとり、さらに境界線によって分断された地域の中の越境相互作用をも射程に入れる。つまり、1) 境界化・脱境界化 (bordering, de-bordering)、2) 境域事象、3) 越境現象の三つの要素を扱うこととする。昨今の<sup>ボーダースタディーズ</sup>境界研究の成果が明らかにしているように、境界地域には国民国家の中央のロジックでは捉えることのできない、独特な境域としての場所のロジックがあり、それが人間社会や自然利用のあり方にも反映している。時として、既存の境界の意味が薄れて (つまり、「脱境界化」する形で) 生活圏や経済圏が形成される場合もある。ところが、このような境域と人間社会との関係に、さらに環境的・生態学的な要素を加えた場合、国民国家の境界と生態学的・自然地理的な境界の不一致から

さらに問題は複雑化する。よって、境界研究では境界と環境の問題についてしかるべき理論化がなされていないのが現状である。それは恐らく、この問題をトップダウン型のガバナンス論として捉えようとしてきたからに他ならない。本企画では、境域の場所のロジックに立脚した境界と環境・社会の問題を、ボトムアップ型で捉え直すことを主眼とする。また、境界とは、そもそも場所のもつ生態的・社会的・政治的コンテキストに基づいて絶えず変化するものである。冷戦崩壊とソ連の解体に伴う地域秩序の再編により、ユーラシア全域において上記三つの「境界」要素の何れもがまさに変容のプロセスにある。それは、脱境界化による協力に結びつく場合もあれば、新たな紛争の火種となる場合もある。

本企画では、文系・理系の多様なディシプリンを背景とする若手研究者が、冷戦時代からポスト冷戦期にかけてのユーラシアにおける境界と環境・社会の変容プロセスとその内容について学際的・分野横断的な議論を行う。これにより、各人のフィールドの場所のロジックから出発しつつも、「タコツボ的」な地域研究を超越し、「境界・環境・社会」をめぐるユーラシアというスケールでの問題の共通性と各フィールドの位相的關係について包括的な知の獲得を目指す。そしてそれは、将来的な理論モデル構築の一里塚となる。

## 6. 開催予定場所

奈良女子大学

(奈良県奈良市北魚屋東町；最寄り駅：近鉄奈良駅)

## 7. 開催予定日

ワークショップ開催（奈良女子大学、奈良市）

2015年2月7日（土）

それ以外に、各自の資金で2度の本企画関連の打ち合わせを行う：

第1回打ち合わせ（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、札幌市）：

2014年12月6日（土）（予定）

WS開催に向けての打ち合わせ、境界研究についての読書会

第2回打ち合わせ（ホテルKKR江ノ島ニュー向洋、神奈川県藤沢市）

2015年3月28日（土）（予定）

WS参加者のうち、地田、渡邊、中村が日本中央アジア学会年次大会でパネル報告を行う予定；報告後、『地域研究』誌での特集企画組織や競争的資金獲得など、WSでの成果還元・研究継続について打ち合わせ

## 8. 企画参加者・役割分担

- ・○地田 徹朗（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター・助教；ソ連史学）（リーダー、WSプログラム担当）：ソ連崩壊前後のアラル海流域河川管理とアラル海災害
- ・渡邊 三津子（奈良女子大学共生科学研究センター・研究支援推進員；地理学、地形学）

(コアメンバー、WS会場担当)：中国－カザフスタン国境地域における青果物の流通と地域農業の変容

・花松 泰倫 (九州大学持続可能な社会のための決断科学センター・講師；国際法学) (コアメンバー、WSプログラム担当)：アムール・オホーツク陸海統合域における越境環境ガバナンスと新しい境域圏の形成の試み、および対馬釜山海峡域における国境観光の発展と境域社会の変容について

・浅田 晴久 (奈良女子大学文学部・講師；自然地理学)：インド北東部における地域固有の生態環境を基盤とした民族間の境域形成

・大西 健夫 (岐阜大学応用生物学部・准教授；水文学)：中央ユーラシアを事例とする自然界における水・物質循環の単位としての「流域」と人為境界である「国境」の関係の検討、および、人間の交易を通して流域（あるいは国境）を越境して、行き来する物質・エネルギーの流れの様態をどう捉えるかということに関する理論的研究

・中村 知子 (茨城キリスト教大学・兼任講師；文化人類学)：辺境から中心へ—社会変化に伴う国境域の対応とその変化 (中国－カザフスタン)

・白村 直也 (中部学院大学人間福祉学部・非常勤講師；教育史学)：チェルノブイリ原子力発電所事故後の民間医療支援と境域社会

(＊白村氏は、本企画での肩書として用いることはできないが、内閣府日本学術会議事務局学術調査員として勤務しており、現住所は東京都小金井市にある。よって、旅費の起点は武蔵小金井駅となる。)

・星川 圭介 (富山県立大学工学部・准教授；農業土木学)：国境をまたぐ生業・農業技術分布および自然災害に関する研究 (タイ、ベトナム、カンボジア、ラオス)

・○峯田 史郎 (早稲田大学アジア研究機構・招聘研究員；国際関係論)：中国－ラオス・ミャンマー境界における越境地域ガバナンス、および自然環境変化・親密圏拡大を伴う社会変容に対する生活者による領域管理

・アドバイザー：○柳澤 雅之 (京都大学地域研究統合情報センター・准教授)

報告者のうち、渡邊、中村、大西は中央ユーラシアにおけるフロンティア地域での環境・社会をめぐる境界化・脱境界化と越境現象について扱う。大西は人間活動に由来して越境する物質・エネルギーの流れについての理論的視座を盛り込む。地田は、ソ連崩壊後の中央アジア諸国の独立による境界化によるアラル海災害への影響について論じる。浅田は、南アジアと東南アジアの境界地域において、冷戦時代に顕在化した民族間の問題を生態環境と農業技術に着目して論じる。白村は、旧ソ連ウクライナでの冷戦の文脈の中で顕在化した境界地域における環境問題 (チェルノブイリ原子力発電所事故) への民間支援と現地社会の問題について扱う。花松は、冷戦終結後に顕在化した、潜在的な問題としては冷戦時代から存在しており、また、現在も冷戦構造の遺産を引きずっている東北アジア地域の海域での越境環境／社会問題について扱う。星川は、冷戦時代は東西陣営に分かれてい

た東南アジア 4 か国について、国境をまたぐ形で存在する生業・農業技術と自然災害との関連性について、境界の意味を踏まえながら論じる。峯田は、冷戦時代は流動的だった中国と東南アジア 2 か国の境界地域について、境域のガバナンスの変化とそれに伴う環境・社会の変容プロセスと現状について論じる。このように、個々のフィールドはユーラシアのミクロナ境域という場所を対象としているが、それぞれが5. で挙げた 3 つの境界研究コンポーネント（のいずれか）に関連しているというだけでなく、全てを総合することでユーラシアの境域のそれなりの部分をカバーすることができ、冷戦時代から冷戦後、今日に至るまでの環境・社会を切り口とした包括的なユーラシアにおける境界知を獲得することができる。

## 9. 期待される成果

今回のワークショップを通じて、ユーラシアの陸域・河川流域から海域にまで及ぶ、自然災害、人為災害、生態環境、農業、物流、境域の社会変容など多様な問題について議論することで、各人の研究対象地域にとっての新たな視点を獲得できる。そして、欧米を中心とする境界研究のメインストリームの議論とユーラシアでの実態がどのように異なっているのか、環境と人間社会を主題として明らかにする。さらに、将来的に理論モデル化を目指すことで、マクロな視野からみた場合にも境界研究・境域地域研究の新たな展開が期待できる。国内的には、『地域研究』誌で特集を組織することを本企画による当面の成果の一つの着地点としつつ、最終的には国際的な境界研究コミュニティに成果還元を行うための第一歩としたい。差し当たりメンバー数名が 2015 年 4 月、Association for Borderlands Studies 年次大会（アメリカ、ポートランド）にて成果報告を行う予定である。また、本企画を単発のワークショップとすることなく、北大境界研究ユニットの組織を活用しつつ、競争的資金の獲得などを通じて、本ワークショップの参加者を中心として今後とも境界と環境・社会について研究を継続する予定である。